

資料1	令和8年2月3日
	第4期第9回豊島区子どもの権利委員会

第4期子どもの権利委員会現地調査報告概要

ジャンプの評価について

2025年9月27日（土）15時30分～17時

森田明美

1. 企画

①窓口のこと

・音楽室の利用者の優先登録の権利がこの事業を利用したい子どもには価値があるので、この事業に興味関心ある子どもにはしっかり周知ができています。

・今回はこうした高校生が主体の参画になってしまっているが、別の運営会では別の目的で来ている子どもが参画しているということだった。そうだとすると、そのことを会議の際に周知してくれると良い。誰もが参加できる形式であることの良さが、当日初めて来所した子どもにとってはよくわからない形の会議になってしまっていることは残念であった。→どのような意見集約方法があるのか？

・すでにこれまで実施した結果、このような全員が参加できる形になっているのかもしれないなと思いつつながら、もしこれまでやったことがない中、やはり子ども集団の中にも半期か1年ごと位で、運営委員会として、子どもたち利用者の意見を中間的に取りまとめる団体を組織して、運営側と交渉するという団体を作っても良いかな？と思った。

直接交渉も良いが、広く意見を集約することにおとなの価値が大きくなっている。

②③事業全体での意見集約を私自身が理解していないことを前提に、

第2段階として事務室前の黒板ボードをつかって、ポストイットで追加意見が出せるようにされているのはとても良い。また職員からの応答もされているのも良い。スペースの問題もあるが、もう少し大きいボードまたは、もう一つボードを横に置き、でその時に集中させたい議論を取り出すということもかんがえたら良いのではないかな。

2. 意見を聴く

①ファシリテートの職員がもう少し声大きさを落として、子どもの声が全面に出るような配慮と、もう少し子どもの言葉が出るのを待つファシリテートだと良い

②誰もが参加できる会議はとても良い。いろいろな目的をもって多様な年代の子どもが利用している様子だった。こうした運営会議に参加しているだけでなく、聴いている、気にかけている子どもの様子も見られたことはとても良かった。意見交換ができる時間帯や企画もありそうなのは良い。

③今年の麻雀企画を紹介するに際して、前年度の子どもたちの要望とルール作りを伝え、企画を話したのは良いが、子どもたちの反応が弱かった。そのことについて、今後どのような形で企画の周知をするのか、また自分たちの要望が実現したプロセスをどこかにまとめておいて、子どもたちに周知するという必要かと思った。

3. フィードバック

①会議の子どもへの返しかたは、月末のお便りとボードでの意見交換ポストイット、おそらく意見箱などもあると思われる。まあこんな形かなと思う

②1にファシリテートについて書いたことと関連がある。

・中高生がかなり多く利用しており、また年連も、課題も多様な子どもの様子をうかがえたことから、あと1部屋分程度の小学校高学年、中学生が交流できるスペース（居場所のわきで飲み過ごせる小学校高学年）、職員の保護のもと安心していられるスペース（事務所脇にいて味噌汁を食べていた女子）など、少し見守ってほしいのだなと思える中高生が小グループで過ごしていた。2階の学習室などは、近所のみんなのひろばを一度学習室に提供してみて、この利用者の一部は移動してくれるかもしれないなおもった。

4. 子どもの権利委員会活動の役割

・子どもの権利の直接的な支援機関としての役割を担っていることを自覚されているこうした機関は、その他の事業とは違う位置づけがみつようであろう。おそらく日常的な子どもとのかかわりのなかで、現在の利用している子どもの実態からするとその施設と職員配置では何ができて、何をしなければならないと感じており、どうしたら、それが実現できるかということ子ども権利の具体化という点で意見交換をすることが必要と思う。それはある程度書類に書き込んでもらうことも可能なのではないか

・ただ、おそらく多くの検討課題があると思われる。その際に、その年ごとに、例えば、今回のように子どもの意見について具体化をどのように進めるか。またにどのように反映するか、参加の学習を進めるか、職員の意識啓発や専門性への支援、ほかの施設との連携などテーマをいくつか絞り込んで子どもたちの意見も入れた現場での議論と委員会議論を併せるような方法も検討したら良いのではないか。

・それを踏まえた現地視察となれば、どんな事業やいつの時間帯や場面を視察してほしいかということを含めて、現場と検討していくことが有効と思う。

5. その他

・児童館などは、時として、継続的な利用者とそれ以外が地域でまったく二分されてしまう事業になりがちである。みんなの広場が近所にあるだけに、その事業とのある程度の対象者の整理が必要な時期かな？と感じた。

・事務室と子どもの居場所との距離が結構あり、事務室周りはおとなの支援が欲しい子どもたち、居場所は子ども同士の活動というすみわけがされているかんじがした。窓口に多くの子どもたちが集まり、支援者との対話が弾む姿が見られることはとても良い。また多様な年代、ニーズの青年への配慮がなされ、居場所を子どもたちが譲り合っていることなども良いと思った

※調査後1週間までを目途に、豊島区子ども若者課までご提出ください。

(提出先) 豊島区子ども家庭部子ども若者課 管理・計画グループ 青木・下山

メール：A0017309@city.toshima.lg.jp、住所：〒171-8422 南池袋 2-45-1

令和7年 9 月 27 日

第4期子どもの権利委員会 現地調査報告書

対象事業	中高生センタージャンプ長崎
調査日時	15時20分
調査者氏名	坪川 愛

STEP1 (企画する)

①実際に子どもたちが事業に参加もしくは利用してもらうために、広報・周知について工夫をしている点。(参画窓口の工夫)

②事業を実施するにあたり、子どもたちへ事前の情報提供をどのように行っているか。(事業の目的・背景)

③事業実施にあたり子どもからの意見や思いを活用しているか。

1、①②会議に参加することで音楽スタジオ予約の優先権が与えられることで、高校生の自主的な参加に繋がっていた。実際多くの高校生が参加していた。

(参加する子どもたちになんらかの利益があることは大切だと感じた。)

2、①②③また、ボード(カフェ看板)に、議題となる子どもたちの要望が、まるで落書きのように自由に記入され、色とりどりのチョークで版面が埋め尽くされていた。

1、2、中高生センタージャンプ長崎の企画運営に子どもたちの声を反映させるための仕組みとして機能している。

(小学生高学年、中学生、高校生が、思い思いの場所において、足の踏み場もないような混雑具合。これでも今日は少ない方だと所長さんがおっしゃっていた。子どもの居場所としてジャンプ東長崎は必要な機関。入り口のカウンターは窓を2面廊下側と玄関側の窓を外してあり、気軽に子どもたちが立ち寄れる場になっていた。トイレには子どもたちが困った時にいつでもSOSが出せるように、関係機関に繋がる電話番号の書いたカードが3、40枚いつでも取れるような形で掲示してあった。子どもたちが調理室で料理をしていたが、毎朝職員が炊いて冷凍するご飯は、何らかの理由で食事が取れない子どもたちのために必要。すでに明日にも米が足りなくなるそうだ。職員だけでは限界がある。地域(民間)と繋がる方法が必要だと感じた。)

STEP2 (意見を聞く) STEP3 (意見を反映して実施する)

①子どもたちの参加の様子で気づいたこと

～子どもや若者たちは安心して活動や参加している様子だったかどうかを中心にして

②事業に参加した子どもの周りの大人(保護者等)の様子?反応はどうだったか。

楽しそうに対話や支援など、活動していたかどうか?

③事業実施にあたり子どもからの意見や思いをどの段階でどのように活用しているか。

①ここでは音楽スタジオの優先権のために参加する高校生がメインで参加していたが、運営に関して要望を持った中学生も参加していた。きっかけは様々だが、自分たちが参加する会議で、自分たちの意見が反映され物事が変わっていく体験ができることは素晴らしいと思った。子どもたちはそれが日常のようで、とても自然体で参加していた。

②ファシリテーターはジャンプ長崎でいつも支援にあたるスタッフで、子どもたちに年齢の近い若い女性に見えた。子どもたちは緊張した様子もなく、ふだんの自分のままで会議に参加できているようだった。子どもたちだけで会議を行うのが理想だと思うが、思惑の違う子どもたちを一つの会議のなかでまとめるのには、第三者である大人の力が必要かもしれない。常に笑顔で押し付けることも急かすこともなく会議を進行していた。

(ジャンプ長崎ではスタッフが常に子どもたちの中にいる。スタッフルームは、大きく開かれたナースステーションのような受付の奥にあるが、そこでさえも子どもたちが自由に行き来でき、訪問した際も数名の子どもたちが談笑していた。居室スペース以外にも玄関から廊下にいたるまで、子どもたちが足の踏み場もないくらい密集している。静かに話したい場合は2階の扉が閉まる相談室が予約できて、いつも予約で埋まっている様子だった。スタッフは子どもたちの話を聞き、問題を抱える子がいれば関係機関につなぐ。今回は会議についての調査だったかもしれないが、ジャンプ長崎自体がその使命を果たしていると強く感じた。)

③会議では、子どもたちから音楽室の機材の修理やゲーム機の使い方についての要望のほか、スタッフ側からジャンプ長崎でのイベントについての説明と参加者募集の告知などが行われていた。

※調査後1週間までを目途に、豊島区子ども若者課までご提出ください。

(提出先) 豊島区子ども家庭部子ども若者課 管理・計画グループ 青木・下山

メール：A0017309@city.toshima.lg.jp、住所：〒171-8422 南池袋 2-45-1

STEP4 (フィードバック) STEP5 (検証・反映する)

- ①子どもへ事業を知ってもらうため、広報・周知についてどのように取り組んでいるか。
- ②職員は子どもの参加によって、事業がどのように変化しているか、事業に参加・利用した子どもが参加前と比べてどのような心境の変化があったか。子どもの参加に関する難しさを感じていることは何か。

①年度はじめに利用を促すチラシを全生徒に配布、利用前の小学生高学年にプレ利用を認めて敷居を低くしている。PTAをはじめ関係各所に月刊広報誌ジャンプ長崎を配布、Instagramやメールマガジンを配信している。すでにジャンプの存在は子どもたちの中に定着しており(施設の中が足の踏み場もないほど子どもたちが集まる)、子ども同士の口コミで安心できる居場所として確立している。

②支援に対する金銭的支援。お腹を空かせた子どもたちのために、職員は毎日炊飯器でご飯を炊き冷凍するが、明日の分の米が無いと悩んでいた。企業からの献品などが、公の施設なので受け取れないという。区立学校のコミュニティースクール化が来年度から本格的に始まるが、ジャンプも地域と繋がる施策(長崎獅子があるなら、そこから繋げて)を打ち出す必要があると思う。

権利委員会の評価活動について

- ①権利委員会委員として事業に参加して、子どもの権利委員会による評価検証として、誰に対してどのような内容を書面で聞くことが、事業評価として有効と思ったか、
- ②書面評価については、どのように委員が参加してその内容を検討することが有効と考えたか

- ①評価委員を設置し、事業に対して前述のSTEP1～5の内容を書面で聞くのは有効。
- ②その事業が子どもの権利を保障しているかどうか疑問を感じるような点がみられた場合に、委員で議論し意見をまとめ、事業主催・運営する職員に助言等を行うことができるようにすること。

その他、ご意見・感想等

お話を聞いただけですが、「豊島区子ども会議」はいろいろ難しいなと思いました。工夫をされていると思いますが、参加する子どもの募集、議題の選出をどのように行なったか、事業について来年度に向けてどのようにしていくのかお伺いしてみたいです。

令和7年11月16日

第4期子どもの権利委員会 現地調査報告書

対象事業	・サンカクスクエア（運営：NPO法人サンカクシャ） ・マハロ（運営：認定NPO法人ピッコラーレ）
調査日時	令和7年10月10日（金）
調査者氏名	森田明美

STEP1（企画する）

- ①実際に子どもたちが事業に参加もしくは利用してもらうために、広報・周知について工夫をしている点。（参画窓口の工夫）
- ②事業を実施するにあたり、子どもたちへ事前の情報提供をどのように行っているか。（事業の目的・背景）
- ③事業実施にあたり子どもからの意見や思いを活用しているか。

本事業は、若者や若年妊産婦が孤立せず、自分らしく生活できる居場所を提供することを目的に企画された事業です。その事業は、自分の力、家族、友人、知人といった私的な努力や関係だけでは暮らしが展開できない若者たちがかかえる困難な状況を社会的な支援や協力によって若者たちの暮らしを支える新しい活動です。こうした事業は必要性が高くなっているのですが、医療、母子保健、労働政策と福祉政策のはざままでこれまでは十分な活動が展開されずに来ました。そうした現代において日本における先駆的な事業として、これまでもいくつかの活動を区内・区外でてがけてきた2つの団体が新規事業として着手された事業と理解しました。

そうした意味で豊島区とURと協働して再開発事業とのコラボによって生み出された場所を有効活用して、豊島区内に有効な困難な状態を抱えた若者支援事業が展開を始めたものといえます。特にこの提供されている施設が古くなって建て替えを予定されているが故に退去してもらった低層の住宅の一角ではなく、地域の一戸建てを丸ごと事業に活用するというこの建物は、事業展開に多様な構想力を伴う可能性があります。豊島区の若者支援が必要とされる地域に有効な新規事業が生まれたことは、とても有意義なことと思います。

自由度という点では、開拓的な事業であるだけに、地域的に建物、実践の場所を確保することが難しい地域で、一戸建てで多様な事業展開が可能な建物が無償で提供するという区のつなぎの力は大きな役割といえるでしょう。今後もこうした企業や区民、子どもや若者たちを支援する先駆的な事業への接続を積極的に実施してほしいと思います。

広報については、これまでの利用者を中心にほぼ口コミで事業展開をしている段階なので、豊島区というより、この地域を利用するすべての若者支援という対象となっています。それはそれでよしということで考えれば、豊島区の社会的な位置として重要な事

業としてこうした事業を育て、まちづくりに大きな貢献をすることになると思われます。

各事業について個別の意見を少し書きます。

マハロについては、保護性も重要であるだけに、広報は限定的にならざるを得ません。

サンカクスクエアについては、地域レストランと若者の交流施設などとしての役割をもっているため、いろいろなメディアにとりあげられているということです。いろいろな課題を抱える若者たちが利用することになるがこうした多様なニーズへの対応が、むしろ公的な保護システムとつなぐより、現在は寄付などによって運営されているということでした。よって、現段階の寄付などによる活動の自由な展開の意義と同時に、今後は、それを福祉制度や就労支援などどのようなにつなぐのかということでは、豊島区全体の支援体制における若者支援について調べる必要があると思いました。

意見反映については、両施設とも現段階ではイベントの企画準備などへの参加、意思確認が中心でしたが、今後は運営などへの参加や意見反映も期待できそうです。

STEP2（意見を聞く）STEP3（意見を反映して実施する）

①子どもたちの参加の様子で気づいたこと

～子どもや若者たちは安心して活動や参加している様子だったかどうかを中心に

②事業に参加した子どもの周りの大人（保護者等）の様子？反応はどうだったか。
楽しそうに対話や支援など、活動していたかどうか？

③事業実施にあたり子どもからの意見や思いをどの段階でどのように活用しているか。

1. サンカクスクエア

現地調査の際、サンカクスクエアには子どもや若者の姿はなく、支援者からのインタビューによるものです。そのなかで、サンシャインなどが整備されている地域に、広い庭と大きな新しい建物を環境整備のアルバイトやレストランとして使えるように設定、リフォームされており、若者たちが自尊感情を高めることができる清潔さと美しさを兼ね備えた施設であることはとても良いと思いました。また、法人の実績や専門性も高く法的リスクや倫理面に配慮した仕組みを整えていることは、支援団体として非常によいと思います。職員が増え、そうした自前の専門性と同時に、豊島区や東京都、国などの機関との連携がどのようにできるか期待したいと思いました

2. マハロ

ちょうどハローウインの準備を地域の支援者が中心になって行っているところを見ることができた。地域子育て支援機関や自治会、近所の人との関係も良好ということを知り、地域で安心して運営されている点は、孤立度が高い人たちを対象とした活動において重要な視点である。その点を大切に運営しており非常によいとおもいました。

STEP4（フィードバック）STEP5（検証・反映する）

- ①子どもへ事業を知ってもらうため、広報・周知についてどのように取り組んでいるか。
- ②職員は子どもの参加によって、事業がどのように変化しているか、事業に参加・利用した子どもが参加前と比べてどのような心境の変化があったか。子どもの参加に関する難しさを感じていることは何か。

子どもや若者への広報・周知の強化については、現状、いずれの団体も受け入れ可能人数に限度があるため、積極的な広報を制限しています。保護施策、福祉施策や制度とどのようにつなぐかということを探る必要があります。孤立している人に情報を届けるためにはどうしたらいいかというときの一つは基礎自治体の役割としてあるのは、早期発見、早期対応です。

できるだけ早い時期から公的な支援につながれるようにすること、そうした機会を作っておくことが有効です。すべての事業を紹介し、理解してもらうのは不可能ですから、相談できる人を地域に配置してそうした人を怖がらずに相談できるような仕組みにすることが有効でしょう。それがオンライン上であれば対応は人の配置よりも容易にできますので、材料作成やシステム作成によって広報を有効に進めるとよいと思います。

権利委員会の評価活動について

- ①権利委員会委員として事業に参加して、子どもの権利委員会による評価検証として、誰に対してどのような内容を書面で聞くことが、事業評価として有効だったか、
- ②書面評価については、どのように委員が参加してその内容を検討することが有効と考えたか

1. ①②について

利用している若者や若年妊産婦本人への質問や、実施しているときの対応をみる必要があるが、この施設のような場合にはそれが可能かどうか、またこの施設のようにまだ始めたばかりのときにはそうした場ができていないことや、そうした場に委員が参加することは許されないことが多い。書面でということになると支援者

が印象や聞き取りをして書くということになります。

個別事業評価ではなく、こうした場をとおして、どんなことを子どもの権利委員会としてその年に評価するのかということを考えることが重要と思います。

<今回のこども若者支援事業の視察を終えて、今後委員会の事業として書面質問で子どもの権利実現との評価検証として考えられること>

1. 多様な状況にいる子ども若者たちに、自分たちの取り組みについて年齢としては、いつどうやって取り組み情報を届けたいと思っているか。有効な時期や方法はどのようなものかと思って取り組んでいるか
2. ほかの施設や機関、施策とつなぐときに、子ども若者自身にはどのようにそのことを伝えたか。伝えようと思っているか
3. 子ども若者とは、その人の保護者への情報提供について必要な時にはどのような原則で進めているか

その他、ご意見・感想等

令和7年11月4日

第4期子どもの権利委員会 現地調査報告書

対象事業	・サンカクスクエア（運営：NPO法人サンカクシャ） ・マハロ（運営：認定NPO法人ピッコラーレ）
調査日時	令和7年10月10日（金）
調査者氏名	大伍 将史

STEP1（企画する）

- ①実際に子どもたちが事業に参加もしくは利用してもらうために、広報・周知について工夫をしている点。（参画窓口の工夫）
- ②事業を実施するにあたり、子どもたちへ事前の情報提供をどのように行っているか。（事業の目的・背景）
- ③事業実施にあたり子どもからの意見や思いを活用しているか。

本事業は、若者や若年妊産婦が孤立せず、自分らしく生活できる居場所を提供することを目的に企画されており、その広報・周知の工夫は一定の評価に値します。

1. サンカクスクエア

NPO法人サンカクシャは、働きたいけれど不安や困難を抱える若者を支援するため、2025年7月に複合型就労支援拠点「サンカクスクエア」を開設しました。近年、孤立や困窮状態にある若者が社会問題として注目される一方、物価高騰で生活は厳しくなっています。従来、サンカクシャは居場所や住まいを提供してきましたが、それだけでは就労につながりにくい現状を踏まえ、安心できる場と就労の間に「就労準備」のステップが必要だと考えました。

サンカクスクエアでは、地域や企業の大人と交流できる「サンカクキッチン」を毎週開催し、食事やアルバイト体験を通じて社会参加を促します。また、飲食店営業による就労体験も提供します。さらに、2025年冬からは資格取得や職業訓練を支援する「サンカクオフィス」を開始予定です。この拠点は、豊島区とUR都市機構の協定に基づき空き家を活用し、行政支援やクラウドファンディングによって実現しました。サンカクシャは、居場所だけでなく就労準備を重視し、若者の自立を支える新しいモデルを目指しています。

(1) マーケティング

公式サイトやSNSを活用して地域企業や大人との交流イベントを通じて働く一歩を踏み出したい若者に直接アプローチする仕組みを整えています。これにより、参加のハードルを下げ、参画窓口を開かれたものになっている点は優れています。ウェブサイトやパンフレットで目的や背景を明示し、利用者が安心して参加でき

るよう配慮しています。

(2) **メッセージ性**

「働く一歩を応援する」というメッセージを前面に出し、対象者に分かりやすい情報提供を行っています。

(3) **意見反映の機会**

子どもの意見や思いの活用については、イベント内容やアルバイト機会の設計に若者の声を反映しています。

2. マハロ

認定NPO法人ピッコラーレは、未婚や若年で母となった女性たちが安心して集える新しい居場所「マハロ」を2025年夏に開設されました。

孤立しやすい若年母子が互いに支え合い、イベントや日常を共有しながら主体的に場を育てていくことを目指しています。名称「マハロ」には、仲間への感謝や「あなたはそのまま大丈夫」という思いが込められています。

日本では未婚や10代での出産は少数派であり、偏見や孤立に直面することが多く、虐待や母子分離のリスクも指摘されています。こうした現状を踏まえ、ピッコラーレは東池袋の一戸建てを拠点に、地域とつながりながら若年母子が安心して過ごせる場を提供しています。

(1) **マーケティング**

既存の「ぴさら」利用者ネットワークや医療機関との連携を通じて、孤立しがちな妊産婦に情報を届ける工夫が見られ、対象者に届く広報戦略が意識されています。また、ウェブサイトやパンフレットで目的や背景を明示し、利用者が安心して参加できるよう配慮しています。

(2) **メッセージ性**

マハロは「安心できる居場所」という理念を強調することで、対象者に分かりやすい情報提供を行っています。

(3) **意見反映の機会**

マハロが利用者自身が主体的に場を育てる仕組みを導入している点で、参加型の企画が実現されています。

STEP2（意見を聞く）STEP3（意見を反映して実施する）

- ①子どもたちの参加の様子で気づいたこと
～子どもや若者たちは安心して活動や参加している様子だったかどうかを中心に
にして
- ②事業に参加した子どもの周りの大人（保護者等）の様子？反応はどうだったか。
楽しそうに対話や支援など、活動していたかどうか？
- ③事業実施にあたり子どもからの意見や思いをどの段階でどのように活用してい
るか。

1. サンカクスクエア

現地調査の際、サンカクスクエアには子どもや若者の姿はありませんでしたが、スタッフから伺った内容からは、宿泊対応に関する指針が明確であり、実際の経験に基づいた運営がなされていることがうかがえました。

例えば、衛生面への配慮として、臭いが気になる場合には入浴を促す対応を行っているとのこと。また、宿泊は原則として認めておらず、例外的に宿泊を許可する場合には、必ず法定代理人の同意を得ることが条件とされています。さらに、こうした対応は顧問弁護士と相談しながら慎重に進めている点も特徴的です

このような運営方針は、サンカクスクエアの理念である「安心できる場で働く自信を獲得する」という目的に沿ったものであり、若者の安全と権利を尊重しながら支援を行う姿勢が感じられます。

単なる居場所の提供にとどまらず、法的リスクや倫理面に配慮した仕組みを整えていることは、支援団体として非常に肯定的に評価できる点です。今後、こうした取り組みが若者の信頼を高め、安心して利用できる環境づくりにつながることを期待されます。

2. マハロ

現地調査は2025年10月に行われましたが、「マハロ」では、現地調査時ハロウィーンイベントに向けた準備が進められており、活動が地域に根付いている様子がうかがえました。地域住民との関係も良好で、地域からの支援を受けながら運営されている点は非常に肯定的に評価できます。

また、プライバシーに配慮した事業運営がなされており、利用者が安心して過ごせる環境が整っていることも確認できました。

以下は、少し論点がズレますが…

財政面では、寄付金として月額1,000円を支払う支援者が約300人いるほか、区の補助金を活用して運営されています。

現状は概ね順調ですが、将来的には補助金に依存しない体制の構築が望まれます。補助金は社会情勢や区政の影響を受けやすく、短期的には有効であっても、長期的な安定性という観点では不安材料となり得るためです。

これは「マハ口」だけでなく、NP0法人全体に共通する課題であり、持続可能な資金調達の仕組みを確立することが重要です。こうした課題を乗り越えながら、地域と連携し、若年母子が孤立せず安心して過ごせる居場所を提供する取り組みは、社会的に大きな意義を持つものといえます。

STEP4 (フィードバック) STEP5 (検証・反映する)

- ①子どもへ事業を知ってもらうため、広報・周知についてどのように取り組んでいるか。
- ②職員は子どもの参加によって、事業がどのように変化していると考えるか、事業に参加・利用した子どもが参加前と比べてどのような心境の変化があったか。子どもの参加に関する難しさを感じていることは何か。

今後の課題として挙げられる子どもや若者への広報・周知の強化については、現状、いずれの団体も受け入れ可能人数に限度があるため、積極的な広報を制限している状況が見られました。

事業の目的である「孤立防止と自立支援」を達成するためには、適切な広報戦略が不可欠です。具体的には、SNSや地域の子育て支援センター、学校、児童相談所などとの連携を強化し、対象者に直接情報が届く仕組みを整えることが考えられます。また、広報の際には、利用条件や定員、事前予約制などを明示し、混乱を防ぐ工夫が必要です。さらに、動画や体験談を活用したオンライン説明会を定期的を開催し、安心感を与える情報発信を行うことも有効です。

一方、受け入れ数を増やすためには、人的・物的資源の拡充が必要です。具体策として、地域ボランティアや企業との協働によるスタッフ増員、クラウドファンディングや寄付キャンペーンによる財源確保、そして行政との協議による追加拠点の確保が挙げられます。

また、オンラインプログラムやグループセッションを導入することで、物理的なスペースに依存しない支援を提供することも可能です。こうした取り組みにより、広報を積極化しながらも、受け入れ体制を強化し、より多くの子どもや若者が支援を受けられる環境を整えることが期待されます。

権利委員会の評価活動について

- ①権利委員会委員として事業に参加して、子どもの権利委員会による評価検証として、誰に対してどのような内容を書面で聞くことが、事業評価として有効だったか、
- ②書面評価については、どのように委員が参加してその内容を検討することが有効と考えたか

1. ①について

まず利用している若者や若年妊産婦本人への質問が重要です。彼らには、居場所や支援を利用する中で安心感を得られているか、意見を自由に言える雰囲気があるか、プライバシーが守られていると感じるか、そして参加前と比べて孤立感や不安がどのように変化したかを尋ねることが、事業の実効性を測るうえで必要です。

また、保護者には、同意手続や説明が分かりやすかったか、安全面に不安がなかったかを確認することが望ましいでしょう。

さらに、スタッフやボランティアには、運営方針が適切に守られているか、個人情報や安全への配慮が十分か、広報や受け入れ体制に課題があるかを問うことが有効です。地域住民や協力企業には、活動が地域に受け入れられているか、トラブルがなかったかを確認し、運営責任者や顧問弁護士には、指針や同意書の整備状況、苦情対応の仕組み、補助金依存への対応策を尋ねることが評価に資すると考えます。

2. ②について

委員会が事前に質問内容を検討し、専門用語を避けて分かりやすい言葉で作成することが重要です。

回答は匿名で回収し、個人が特定されないよう配慮します。

集まった回答は、数値化できる項目と自由記述の両方を分析し、現地視察で実際の運営状況と照らし合わせることで、書面だけでは分からない実態を確認します。

さらに、委員会は結果をもとに改善点を整理し、期限や責任者を明記した具体的な提案を行うことが望まれます。

最終報告は専門家向けだけでなく、利用者や地域にも分かりやすい要約版を作成し、フィードバックの場を設けることで、透明性と信頼性を高めることができます。このようなプロセスを通じて、子どもの権利を尊重しながら事業の質を継続的に向上させることが可能になります。

その他、ご意見・感想等

サンカクスクエアとマハ口の取り組みは、いずれも社会的に意義があると感じました。サンカクスクエアは、単なる居場所の提供にとどまらず、就労準備という現実的な課題に正面から取り組んでいる点が評価できます。若者が安心できる環境で自信を育み、地域や企業の大人と交流する仕組みは、孤立防止と社会参画の両面で効果的です。また、顧問弁護士と連携しながら宿泊対応や安全管理を徹底していることは、法的リスクへの配慮が行き届いており、信頼性の高い運営だと感じました。

マハ口は、若年妊産婦や未婚母子という見えづらい孤立に焦点を当て、安心して過ごせる居場所を提供している点が重要です。利用者が主体的に場づくりに関わる仕組みや、地域との良好な関係は、単なる支援を超えて「共に育てる場」を実現しています。プライバシーへの配慮も確認でき、利用者の尊厳を守る姿勢が感じられました。財政面では補助金依存が課題であり、長期的な安定性を確保するためには、寄付や自主財源の拡充、企業との協働など持続可能な仕組みづくりが不可欠です。

両事業は「孤立を防ぎ、自立を支える」という目的に沿った実践的なモデルであり、今後は広報・周知の工夫と受け入れ体制の強化、そして財政基盤の安定化が鍵になると考えます。こうした取り組みが全国的なモデルケースとなり、若者や若年母子が安心して未来を描ける社会の実現につながることを期待します。